

-- Page 1 --- 398—399 [時系列整理済み](#)

通航一覧 256 イギリス国部5 狼藉始末 肥前国長崎 江戸で執筆か？

前段略

佐賀遠見番白帆中心 隠密型呼び出し出方申付 用意銀御証文横文字1通渡す 吉岡重左衛門 紅毛船でなければ即通報せよ  
手付出役と推測

波止場諸役諸熊 船用意申し渡し

年番大通詞中山作三郎にカピタンに通知し見届け紅毛人の用意申し渡せ

遠見番呼び出し白帆注進無いは何故かと聞き質す 当時沖出方引取りのため小瀬戸の注進無かった 飛船で尋ねる

児島唯助吉川次郎平出方申付 御証文用意銀カピタン書簡渡す

盗賊改方田口惣兵衛出方申付 盗賊改方遠見番とも沖出につき波止場諸役諸熊作大夫に舟用意

年番町年寄に白帆注進があったのでいつものように心得るように剪紙で申遣わす

野母遠見番原嘉平卯中刻未申245里沖にオランダ船一艘発見の注進申し出る

関傳之允白帆注進深堀役人から来たと書付香焼沖午未20里

宿老森又左衛門会所目付河野伴左衛門そのほか用部屋に来て正徳年間以来の延着と聞く 大慶に申し聞く

小瀬戸遠見番当番古川徳四郎参上 午の刻278里沖紅毛船白帆

1 中山作三郎カピタンに伝えた 館内大慶 ドゥーフ 密かに疑念を表示 奉行所内市中皆大喜びのこと 399 下

-- Page 2 --- 400—401 [時系列整理済み](#)

出発がこの時期まで遅れることは無い筈 嵐で櫓の1本2本折れておかしくない 船足遅いはず 風に向って速く櫓に異常なれば他国船かも 警戒準備もあるのでこれを言わねば不忠 御役人?? 御奉行に内密に申し上げる

福岡藩聞役花房久七に白帆注進ありと手紙を遣わす

検使菅谷上川への奉行の指示 注意を払え 手続き徳右衛門仔細に指示

年番大通詞中山作三郎にカピタンに通知し見届け紅毛人の用意申し渡す 筆者ホウセマンシキムルを差し出す

波止場諸役諸熊白木呼び出し検使船紅毛船

黄昏時吉岡重左衛門 一報 事件詳述

検使菅谷上川より紅毛商船に間違いない無しの報届く

拉致後緊急配備制 山田花井 鉄砲20挺など

代官高木作右衛門に直達 舎弟道之助稲佐郷へ

岩原屋敷も出動

具足着用 上條徳右衛門の具足は家来毛利健助

-- Page 3 --- 402—403 [時系列整理済み](#)

部屋に持参 高橋忠左衛門(不明)は詰所で着用 奉行も小具足 全員が準備

年番佐賀藩聞役関傳之允呼び出し 慶長14の南蛮船焼沈を再現の意図 手順につき書面差し出せ

対面所に上條徳右衛門案内して国許へ増援を直達

砲術家町年寄薬師寺久左衛門に命令 蝦夷地騒動以来兼て奉行所から異国船防衛につき江戸面に報告の本箇所に矢配り両組を率いてかねて定めた通り町年寄見習いも人数頭取 異国船近寄れば石火矢で撃ち払え 本久四郎兵衛(不明)に警護場所人数割り付け書を渡す

御武器蔵預かり三浦藤次郎(不明)永尾亀三郎(不明)見習5人呼び出し薬師寺久左衛門へ石火矢大筒渡せ地車人足は五箇所宿老会所に必要人数を申し立てよ(これは荷捌用の人足か?) 御旗御幕具足鎖帷子旗竿など取り揃え御陣屋(西役所か?)へ差し出し作りおけと上條徳右衛門が命ず

又左衛門から煙硝の求めがあったので煙硝蔵預かりの塩見元助(不明)に命じ薬師寺久左衛門立ち合いで渡せと命じたら程無く煙硝渡し切りますとのこと薬師寺久左衛門に命ず 夜に石火矢配置する地車の音人夫達の掛け声山谷に響き雷鳴の如し書記役手附斧生源一郎に上條徳右衛門が奉行に脇差用意せよと申された件書留めておけと命じたが楼(見張り楼か)上や座敷を走り回り憔悴して記録し損ねた 引渡日記には省略

役所付触頭に対面所で警備箇所中村禮次郎木部幸八郎命ず

人見藤左衛門松平佐七 港内見回りに出る

→家聞役呼び出し 書院にて異国船渡来の非常事態を国許へ走使で伝えよ さらに他の船も現れれば増援部隊を出すよう奉行直達

福岡佐賀藩聞役へ国許へ増援派遣要請を命ず 唐津藩聞役小林大登には水野和泉守が在邑なので状況次第で増援部隊を出動

させる心構えでいるように直達 上條徳右衛門が質問に答え海陸持ち場(台場や領地)のほか大勢の人が集まる場所の警護など指図

年番町年寄後藤惣太郎廣間に詰める

→散使町使の両組と唐人版一同呼出し広間にて非常事態につき懸命に頑張り手柄を立てよと奉行直達 一同平伏後藤惣太郎が承り年行司も退出する

両家聞役呼出し対面所で異国船の狼藉オランダ人～人を拉致したまま出帆させるわけにはいかない 差止める手段を準備するがそれが整わないうちに出帆するようなら躊躇なく打ち砕けるように両家で打合せ規則に則って守備隊の人数を配置し石火矢台場二の目三の目足並みを揃え焼き打ち出来るよう準備が出来れば即刻出動せよ 焼き打ちの段取りもまだ揃わないがすぐに用意出来るはずと直達

夜六半刻 検使菅谷保次郎上川伝右衛門帰り、オランダ人～人拉致された事を報告 奉行激怒取り戻すまで帰るな

地下役人総動員 上條の檄 ページ??

… Page 4 … 404-405 時系列整理済み

上條徳右衛門二人から聴取 大息齒の根も合わず 刃傷に及ぶべき所 奉行の迷惑お考えもあるのではと言いつ

奉行 貌を改め罵言 小禄といえど公禄 西国諸藩の見るところ深く恥なり 今朝も言った通り紅毛はお預かりの大切な人々うかつに先に出してはいけないと嚴重注意した 来航船に紅毛確認書(返翰)も尋ねずなおざりにして刃傷に及べばかえって混乱を招くなどその言いつは許しがたい 刃傷と無事に取り戻すことの軽重 即刻戻り取り戻せ 心配苦勞もこの非常時にはいつものような許しは出来ない 潔く立ち向かい死力を尽くして取り戻せ 諸事手当上條徳右衛門に申しつける 二人帰府後押込処分

奉行 上條徳右衛門に多事混乱 それぞれが持分の間違ひのない判断をするように申し渡せ

両家福岡佐賀聞役に非常時に付きこの地で働ける者どもは御陣屋に詰めていつでも役立つように準備しろと命ず

町々乙名唐蘭通詞宿老とも帯刀願いが出たので貸刀の心得でこの時期限りで許可 手柄立てよと命ず そのことを詰めている後藤惣太郎にも申し渡す これにつき年寄の使用人からも帯刀願いが出て上條徳右衛門が承知する

沖の者は土井の首という肥前領地へ逃げ陸路戸町番所へ来る

この騒動に検使二人は驚き恐れ前後の見境なく西泊御番所に逃げ込んだので地役人らも我先に逃げ皆に試泊に落ち合う。落水した通詞二人はようやく船に取りつき沖土井首というところの肥前御領所に3里逃げ込み陸伝いに戸町御番所まで来たという。この時申の下列

**異国船異船は高針島脇 約一里半 鐵砲を入れた** オランダ人二人を奪ったのちにイギリス国旗にしたがどこの国の船かわからない

同月十八日同断(或書状の意)

事件概観(略)

**十六日昼頃より**俄かにお手当あり、長崎大筒役薬師寺久左衛門大波止に出張、万幕を張りお預かりの石火矢大筒などを船船に乗せた。竹束作成のため長崎中の材木屋のある竹を買い上げ大工と桶樽修繕屋を全員大波止に集め数多くの竹束を作った港内にいた諸国の商船や唐船は稲佐ならびに大浦あたりへ移し港内では発砲も構わないとされ、唐人屋敷オランダ屋敷そのほか港内海手市内を固め町年寄に命じて「町の乙名火消し達が警備につき地役人は折柄

… Page 5 … 406-407 **時系列整理済み**

地役人は御借刀という名目で俄かに帯刀許可帯刀して昼夜徘徊 昼は大旗夜は高提灯 役人は火事羽織長崎中上を下と大騒動 諸家蔵屋敷も夜回り門に大丸桃灯を灯し **図書頭も15日夜遅く海手市中見回り** 嚴重な中にも大騒動

同日長崎出或書状

事件急報(略)不覚の事故で周章不手際

同日同断

肥前筑前大村に増援指令 他には類船無いので御国々(諸藩か?)より軍勢を出すには及ばずと諸家に申し渡す

3 陸手海手とも高張提灯篝火夥しく二里にも及び真昼のよう

諸家御付人並びに地役人奉行所前に集まり隙間もない 陣羽織野袴または火事装束あるいは半纏、フツ先羽織着用

同日同断

黒船焼打ちの決心なので最初は大村様には港内の大村藩領地警備を、唐津様へは長崎御回りに及ばずと伝えたが、にわかには大村さまには長崎出動を、松平肥前守様へは軍勢加勢を、唐津には軍勢出動を伝える

同年9月21日オランダ通詞名村多吉郎書状

赤白青横縞の旗 検使ら四郎が島辺りへ バタバア発のオランダ船とオランダ語で答える

去年帰帆の役人オランダ「ハクキス」は渡来しているか 乗っている

本船より端船に縄を付け引き付ける

八月の9日大村上総介口上覚

異国船一艘昨十五日長崎に渡来のため領内海固め船の儀松平図書頭(敬称無し)より現地の私の家来に命じられたことこの報告 407下

右同断一緒に差し出した文書口上覚

昨十五日の異国船そのままにはしておけず打ち砕くよう**陸地警護差し出す?** この船は神崎に来て万一御番所当番松平肥前守軍勢が揃わず出帆させてはならないので人数揃い次第神崎を固めよとの指令が松平図書頭から現地の家来にめいじられたので早速陸地と海手警護の軍いし勢を差し出しましたこと御報告 八月十六日大村上総介

この文書は至急飛脚で9月3日に老中土井大炊頭利厚に笠坊八助が持参取次の落合権平に渡す 赤間関渡りの際「風向き悪く

大井川満水のため遅延 407下

… Page 6 … 408-409 **時系列整理済み**

八月十七日松平肥前守御届

(事件詳細略) 事件につき当番の藩から警護船を出せとの命 日本人には危害の恐れはなさそうだが何かあるかわからないので出動するように長崎の家に命令があり承知しましたと届け出 この届けは 8月30日老中青山下野守忠裕に届く 408上 8月30日島原藩松平主殿頭御届 事件報告 オランダ人を拉致 少人数のため引き返したとの報告 408上

9月4日松平官兵衛家人(家来 御届 異国船が到来したので現地の家来がお伺いしたところ松平図書頭様(敬称あり)がご対面で(事件略)当番方並びに番船は配置につき出帆するような気配があれば係留するように、かつ非番方が受け持つ石火矢台場に手当するように申し渡され、黒田甲斐守(筑前国秋月城主)承知いたしました よって軍勢について官兵衛家来黒田源右衛門も早速遣わしました 右の件官兵衛代理甲斐守申し上げます使者によりご報告 戊辰崎陽記 文化戊辰長崎異変録 408下

通航一覽256終 409下

通航一覽257イギリス国6

狼藉始末 八月15日夜異人端船3艘で港内を乗り回すとの注進に奉行が要所警衛を沙汰し両番所にてその船を捕らえ召し取れと肥前筑前その他の聞き役に命ず 在留のオランダ人御朱印を携えて奉行所に来る

文化五年八月十五日 409a

町年寄一同呼び出し 高島四郎兵衛、高島作兵衛、福田十郎左衛門、久松善兵衛、後藤惣太郎、葉師寺久三郎(左衛門か?)罷り出書院にて直達 異国船バツテイヤ端船で港内の唐船を襲ったとの注進あり そのまま座を立つ 四郎兵衛一人を今まで呼び入れて直達

固め人数書割書面など上條徳右衛門より受け取るよう命じられ、用部屋にて書付を渡す この時港内俄かに大騒動の声響き<sup>4</sup>渡る 唐船、船毎に煙を

Page 7 ---410-411

揚々を焚き、唐館に合図の大鉦を打ちフウフラを吹きたて唐館でも同じく合図の大鉦を打ち援兵数艘漕ぎ出し(諸国大小廻船は船火事と認識していた)異国船から火をかけられたと思い上陸の者ども一同船船に集まる 市中はオロシヤ乱入と思ひ込み山野に立ち退きすべしと男女が道々に溢れ海陸とも一時に騒ぎ立て人や物音大波の動くがごとし 稲佐郷においては夫人の乗る船が捕らえられ北瀬崎では漁師が捕まり深堀では佐賀の足軽が捕まり食物なども残らず奪われ梅香崎辺りの水門を打ち砕いたなど種々雑説が混乱したので総町大人頭取石本幸四郎高石行太夫に厳しく市中を取り締まるよう命じ港内の船舶の取り鎮めは波止場両役人に港内の船の往来禁止を命じた

夜五つ時(20時)異国船バツテイヤに乗り港内数艘乗り回しているとの注進あり これにより両家間役に命ず いずれも小舟なので必ず召し取れ 御番所の者どもはどついてもどついてもこの数艘も御番所前の通過を見逃したのかけしからん 早々に召し取れと奉行直達

なぜ御番所の通過を許したかと佐賀藩に糺したら関伝乃丞 趣意書を差し出す

番人が職務怠慢ではないが夜中のため異国船とは思わず見損ねて通過させた不調法の段恐れ入って奉りますと書きつけ差し出す この件で(佐賀藩主)鍋島家蟄居命じられる

異国船異人バツテイヤに乗りおよそ三十人ほど乗り組み乗り回したので各所から注進矢の如し海陸大騒動なので吉仲雄勇蔵を佐賀藩蔵屋敷役人にバツテイヤを召し捕らえぬよう早使として遣わす 同じく稲佐郷見回りに田島兎毛 同じく遠見番長

屋下波止場見回り渡邊平蔵 同じく出島見回り宇喜田権蔵 同じく乙名頭取石本幸四郎に対面所において町々取り鎮めを再度言い渡す



Page 14 --- 白ページ 50-51 ペリユー艦長の英文手紙「目的はバタビア発オランダ船の拿捕 期待通りにいかず残念だがオランダ商館の攻撃は絶対行わない(断言)ナポレオン ボナパルトがいなければオランダイギリスは友好国の筈だった、ジャワ又はヨーロッパへの手紙を中国経由で送らせる 尊敬と敬意をもって忠実なる僕より(大袈裟な表現は当時のもので他意はない)

Page 16--- 412—413 時系列整理済み

直ちに戻った 道で吉仲勇蔵を見かけたのでどこへ行くのかと聞いたところ驚いた様子で咳払いするのみで答えない 後でわかったことは肥前(佐賀藩)蔵屋敷番頭米倉権兵衛に早使を命じられたとのこと この時医師足立梅栄が玄関を大音を立てて開け罵ったのは「この梅栄、医者ながら昼夜詰めて奏者役までも勤めた 玄関を始め詰め役所に人無きはいずれも臆病という病が腰が抜けたと見える 梅栄が薬を与えようと號(叫び)たてたと言う 上條徳右衛門は門外に出た後で知らなかったが給人のうち二人は(吉仲ともう一名不明?)は大いに辱めを受け面目を失ったという

(奉行)カピタンはじめオランダ人と会いずれも心配しているので捕らえられた二人を取り戻すから心配するなど直達

山田吉右衛門御番所から戻り「御番所無人で石火矢の準備も出来ていないと聞いたので即刻出動せよと命じた 花井常蔵は御番所に残り山田吉右衛門だけ戻り内密に?報告?指示を伺う?

夜四つ半刻頃(6時?)奉行大波止、後藤町辺りの警備場所の見回りに出馬、御黒印守護

聖堂預かり向井元仲詰める

諸家聞役一同呼び出し「異国船異人ども上陸の注進があったのでそれぞれ蔵屋敷の警備を固め上陸したら即刻召し捕らえて

陣屋へ差し出せ、抵抗するなら切り捨て構わぬ」と直達

文化5年八月十八日長崎出或書状

端船一艘に四十人ばかり乗り三艘で手分けて稲佐山の方に一艘浦辺浜辺を漕ぎ回り紅毛船並びにオランダ人を「図根探し」6 回る様子、これをオランダ人月夜なのでよく見て取り我々を捕らえに来たと決心して西役所に駆け込んだ

同年九月廿一日阿蘭陀通詞名村多吉郎書状

十五日夜一艘に五十人ずつ三艘に乗り組み石火矢鉄砲そのほかの武器を備え港内を漕ぎ回って本船に戻り、翌十六日また端船

一艘港内の大田尾と言う所に漕ぎ入った、これを捕らえるため小船で漕ぎ出したところ追われているとみて沖に戻った

文化五年八月十七日唐津聞役小林大登書状

三艘諸所乗り回し万屋町方面に乗り回し剣を抜いたとの風説有り、警備陣が出動したら稲佐に上陸した、大勢が出迎えたら又漕ぎ出し出島水門に来てそこから引き返した、かぴたん始めオランダ人は残らず出島を逃げ出し西役所に御朱印持参してそれからは西役所に留まった 波止場の両組は石火矢で警護し異国船異人がお役所に来たら決して上陸させると命じられただし先方から手向かいが無ければこちらから手向かうな、穏やかに取り計らえと仰せられた由、その夜は何も起こらず異国船異人も引き取った

同月十八日長崎町人書状

十五日夜に入り(略)船多い中をはし船(端船の読みか?)三艘乗り回り五島浜から大黒町北御米蔵下に漕ぎ寄せそれより稲佐に漕ぎ付き、三艘一緒になって稲佐浜前を通り船に漕ぎ帰ったという注進が来たので御役所より検使(これは奉行所の役人のこと)並びに地方?屋差し出し浜を警護された、総町辻番所乙名方の勤番である「町方火消しは揚り場に詰めた、稲佐には役方より渡海があったがもう本船に引き上げた、船蔵と御米蔵大波止出島水門梅香崎などに石火矢が配置され火矢方が詰めたのは夜明けのことである 市中も過半は夜明かし(眠れなかった起きたまま) 蔵屋敷(諸藩屋敷)から早飛脚櫓の齒を引くがことし

出島カピタン大恐怖出島を避退出島は空き地になり長崎会所から詰めた

当年当番は佐賀藩の順であるオロシヤ御手当にて番手の外着の衆のうち米倉権兵衛石火矢方多人数深堀詰所に勤番すべきところ御奉行所より引き払いを仰せ出され残らず警備所を引き払っていた、筑前組頭吉田七郎太夫は船手として詰める所同様に取り払い帰国、これにより当地備えの両番所とも無人になった

Page 17 -- 414—415 時系列整理済み

同月廿七日松平官兵衛(筑前国主)使者口上覚

長崎松平図書頭様(敬称)十五日夜家来呼び出され異国船異人端船にて港内乗り回しの風聞有り(略)港内に来たら一人でも召捕る様命じられと報告がありましたのでこの件国許家老より申し上げるよう連絡がありました

八月廿七日 官兵衛家来 関 札

同月晦日松平主殿頭(肥前国島原城主)御届

異国船へ運行した紅毛オランダ人を何とか取り返せと検使を送ったが結果は不明、一艘なので軍勢送るには及ばず、もしほかの船も現れるようなら知らせる、端船で港内乗り回しもし上陸したら召捕り差し出せと現地家来に松平図書頭(敬称無し)命じたと報告あったので届けます 八月晦日 松平主殿頭 文化戊辰長崎異事録戊辰崎陽記

ここから徳右衛門の日記か？

同夜(菅谷と上川?)また異国船に赴き協議するに彼野菜薪水を貰えば蘭人オランダ人を返すというから

望みの品を与えて蘭人二人を取り戻そうと図る

文化五年八月十五日

両家間役をすぐに呼び出し紅毛オランダ人を取り戻すように検使を派遣したので警固船をすぐに出勤させるように申し渡す  
また放火山準備の件も奉行じかに尋ねる

波止場役に検使船警固船を用意せよと命ず↑菅谷上川の再出勤か？

7 船並びに警固人数揃ったので阿蘭陀オランダ人取戻しの検使菅谷保次郎上川伝右衛門が発発した

小通詞末永末長甚左衛門Ⅱ度々異国船に乗付け通詞をした功により代々小通詞の家柄に程無く大通詞に転役

この時中山作三郎が廊下で(上條徳右衛門の?)袴の裾を押さえて「御検使を今遣わせば卵をもつて石を叩くに等しく、暫く待ち警備の軍勢が揃えて御検使が行けば威敵に恐れをなし功成ることでしょう、今のままでは功成るどころか却って笑いものになりますよよくお考え下さいと申し上げる

この事を聞き奉行大いに立腹検使の出發遅れている且つ通詞どもが非常時の軍勢の指揮計画をすることではない取り合つたと怒る

石橋助左衛門取り戻し方異国船沈め方などに見聞したこと

同じく中山作三郎申し聞く二人別の間にて申し聞く

かぴたん、へとるが色々と用部屋で方法につき落涙しながら(同僚が拉致されている恐怖と悲しみか?)話した様子、入港したイギリス船は傍若無人の有様オランダ本国であればそれぞれ兵器の備えもありこの船を留置してどのようにも水中から鎮めることもできるが(われらは)他国の客(他国に住む客人の身)残念ですと頻りに落涙した、本国での留置法を聞いたところ一々法律にかなうことなので宿老共に申しつけ鉄鎖を打立させ(用意させ?)紅毛オランダ人が指図して平鎖厚薄大小手本の鎖を又左衛門持参して見せる精を出して打ち立てる用命ず今回用いなくても後日の役に立つことがあろう

奉行 側近に苦況を漏らす

奉行が書院の脇の無人の場所に招き寄せ(上條徳右衛門を?)膝を摺り寄せて言うには「今通詞たちの言ったことは不心得ではないがそれは尤もだと意見を入れてはこの非常時の命令など一向に行き届かぬ兩人とも石火矢に立ち向かう出役は大変なことではあるが非常時日頃猪武者と呼ばれる者もこの時に隠している況や猪武者で無い者はなおさらであるその方にも怒りをぶつけたことを気にせずこの事態の良策があれば遠慮なく申せと言われるので私はまだ異国船を見ておりません使者(検使か?)

の対応地役人の懸合(動き働き戦い)には当惑しており一寸の計策もありませんと答えると兎に角しつかり頑張ってくれ頼むとのこと(中山作三郎必死の忠言を奉行に届け激怒したことの詫びか)

御用船太平丸静海丸を大波止へ回すよう佐藤幸之進より小比賀慎八に命ず松本左七も付き添わせ船頭共を指図して御船おろし( )いたし翌十六日四時ころ( )時( )時( )時( )船飾いたし回航する(この二艘は検使再出動用か)

武器は長柄(長槍)十筋御弓五張鉄砲五挺

検使の者が言うには異国船異人ども水薪など乞うているこれを届け捕らえられたオランダ人を釈放することと話す御代官高木作右衛門手代小比賀慎八に申しつけ稲佐郷より水船すぐに回航する

波止場役に野菜薪蕪根米等用意を命ずこの品々揃ったというので検使船に乗り込みを指図異国船へ向かうよう指示

日本人らしい几帳面さ

-- Page 18 -- 416—417

御船頭土師喜八再勤水主共帯刀願い書を小比賀慎八用部屋まで差し出す非常時でもあり支配に取り計らうよう命ず

沖御番所 紅毛オランダ人取り戻すことを心がけずと木部幸八郎諸事と合わせ報告 波止場役へ命じ警固船用意出動申し渡す

五箇所宿老揃って私どもこれまでの経緯もあり先年南蛮船焼き討ちの際船仕切りは宿老が一手に引き受けさせられた例があり

当時は力及びませんでしたを手附人足五箇所会所に集めておりますので( )つても( )用命を

大阪堺宿が来て言うには老廻船23百石から千石積みまでの隻( )つでもお使いください

中山作三郎がかぴたんの申し出を伝えるオランダ人を取り戻すにも( )ンパンヤ会社船印を使つてのぞみの品を送りたい その通り聞き置く( )これがペリユー艦長のドゥーフへの謝辞につながる この印は何事も違約無し印

田口惣兵衛帰り沖の状況を報告 また行くべきかと言うので留め置く

夜八つ時頃(午前2時・午前3時)末長甚左衛門戻る 沖の様子を奉行松平図書頭直に尋ねる直達

8 イギリス船は賊船ではなく軍船の由乗組み350人入港の理由はわからず(長崎秘話)

文化五年八月廿日長崎出某書状

先の便で申し上げた異国船の件( )の( )日( )の上刻異国船より申し出た内容を戸町御番所に出張中の検使より奉行所に届け出

我々は広東に渡海した洋中食物使い切り必要なものを求めてこの地に来ました それを伝える手段がないので謀計をもってオランダの旗を掲げオランダ人二人を捕らえました 食牛( )匹野牛( )匹野菜などを届けてくれれば紅毛人を引き換えに返す

それが出来ないならば考えがある由考えとは港内の唐船日本船始め市中までも(噂デマの拡大の証拠)火炮で焼打ちする由

これは隠密で触れ回るなどの意向、通詞より内談 通航一覧416p下段

ペリユーの嘘 広東出発後訓練に明け暮れた 日誌には長崎が目的地と明記

奉行の返答 願いの内容は分かったが礼儀正しく願い出ることながら異人とはいいいながらその言葉もないのは不届きだが我が国の法を知らないのですその罪を許し願いの通り聞いた品々を取りそろえるので早々に紅毛人を解放せよとの返事

通航一覧417p上段

文化5年8月19日或書状

15日の顛末 略 奉行激怒 取り戻すまで帰るな 正気に返り命を懸けて再び以前の人数で異国船に向かったが警備嚴重なので寄り付けず元のように戸町番所に来て(戸町番所から異国船まで18か町の距離 2km)通詞二人が静かに小舟で異国船まで行き捕らわれた紅毛人を是非返してほしいと申し入れたとのことを奉行所に届けたとのこと

只今( )の( )日辰の刻( )何の知らせもなく昨夜も明月だったが沖の様子陸からは全く分からない 通航一覧417p上段

同月18日或書状 事件顛末略 検使は脇の船に乗り移ったとのこと( )で散々の評判 戊辰崎陽記視聽草 翌19日早天にカピタン旗を見てイギリス軍艦に紛れ無し通航一覧417p下段

水主に帯刀願ひ

・五箇所宿老揃つて南蛮船焼き討ちの際船仕切り宿老が一手に引き受けさせられた例があり手附人足五箇所会所に集合いつでもご用命を 大阪堺宿老廻船23百石から千石積みまで20隻 いつでもお使いください

イギリス船を軍艦と認知 奉行兼ねて達せし佐賀の人数焼打ちの備調はさるにより？その他備の事等夫々指図有り この日異国船の詳細を江戸に報告 通航一覧417a下段  
文化五年八月16日

今朝異国船に旗が立つたのでカピタンに見極めを命じ遠眼鏡を渡したところイギリス船に間違ひなく

Page 19 ---418---419

近習長屋海辺から見た通詞の中山作三郎上條徳右衛門が一緒 カピタン大いに驚き「今朝張替えた旗は敵国イギリスエゲレス」二番の軍船フレガットという船で賊船ではない筆を執り自ら船の絵図を書いて示し長さ30間船の舳先には羽を広げた玉眼彩色恐ろしき鳥の形を付け50挺の大砲(石火矢)上の方より夜中は楯を引いていたが一夜のうちに白塗りの塀をかけたように見える筒毎に火蓋を取り黒い装束で陣笠を被った者が一人づつ火縄を振り今にも打ち出す様子いかにも嚴重稲佐岳の裾高鉾島前に小城を構えたようで一ノマストは123と櫓を掲げ一ノ櫓は八畳敷の広さがありこれも同じく楯を引き石火矢四方八挺かけ筒先自在である船も自在石火矢5挺かかりいる 二三高い櫓にから四方を見張り並びに山形地図台場の仕掛計策を見積りを計り諸軍を警戒し昨夜港内を乗り回した際は港の浅深を計り本船に引き上げたという **主将6歳という屋夜椅子に座り動かざる」と山の如し300人の軍卒は選り抜かれて狼虎兵也**軍器品々石火矢の弾も釘を詰めて兵を倒し火を付けるには銅張りの弾を使うというこれ等の情報は取り戻した紅毛の話 カピタンが描いた旗印絵図は貴重なので上條徳右衛門が所持(用部)屋日記か？通航一覽418 但しこの時中村礼次郎に命じたところ答えよろしからず当人検使を勤める覚悟なく着服手薄(検使としての装うものがない)上條徳右衛門が着服を用立てた彼のこの迷惑(とまどい)の様子を見て人見藤左衛門(と荒船)へ命じる兩人深く出発した江戸表でお調べ人見藤左衛門荒船五兵衛は御褒美 中村継次郎は百日押込 419a上

波止場役白木儀十郎 徹夜で水野菜を用意し本船に積載させたと届け出 418a下段

両御番所 未だ無人手薄不安心 検使より溝口仙兵衛が使者で報告させる 418b下段

今五つ時 昨日の日付のまま報告書 蘭人拉致報告は初めて熊谷與十郎呈書で認め奉行一同読み合わせして確認入港紅毛人を捕らえたことのみだったので紅毛を取り戻す湾内乱入の子細と様子によっては焼打ちすべくと書き直し差し出す 418b下段  
旅中の甲斐守へ刻付町使差立てる 418b下段 記した時刻を明示したり、到着の時刻を指定した書状

右案文両家に貸遣わす 418b下段

両番所手薄の様子で次々に検使を遣わしたが心許ないので人見藤左衛門荒船五兵衛を差し遣わす取計い(交渉？)の時には直談しきだん(要求や抗議を強い態度で) 交渉・折衝・涉外・外交・掛け合う・駆け引き・直談判・直談・膝詰め談判・ねじ込む)五兵衛は引下勤(武士が、その家格より下の職を勤めること)なので槍を持ちたいと申し出て貸槍を渡す 418b下段 **奉行所内佐賀藩への敵意か？ 異国船との遭遇に備えてか？ 二人の褒詞はこの働きか？**

高木作衛門出張につき佐賀へ人数差し出すよう申し達す 419上

代官手代を稲佐から呼び戻し野母支配所の警護を固めるよう佐賀藩に指示してあるので同人も催促せよ

程無く同人引取役所で直談 即刻野母に出張 419上

近習共のうち表座敷楼上で異国船見張りを命ず異国船出帆その他船を物見し変化があればすぐに通知せよ 419上

人見藤左衛門その他が今朝報告した通り御番所手薄に催促しているが 諫早豊前より軍勢まもなく到着と言っぱかりで何時との明言無い 通詞より異国船に派遣した横文字使も遅れようやく今出船との注進を溝口仙兵衛が伝える 419下

佐賀聞役に焼討ちの調べはついたか 焼沈の方法を教えよと掛け合っても 私にはわからないその件は深堀役人に伝え即刻報告せよと命じてあるとの答え 419上

向井元仲詰める

後藤惣太郎昼夜とも詰める

朱座(朱や朱墨の製造販売商人)の者ども現れ御用があれば仰せつけくださいと申し出る 419下

オランダ軍の攻撃法 船焼打ち 水中(水上?)の作業に必要な品々 大通詞中山作三郎が聞いてきた計略について関傳之丞に申し入れたところ手広の場所はどうあるべきかその件については深堀の役人に尋ねるとの返事

但し沈め方の巧みな計略はここに載らず 同人に野母出張の固め人数(動員数)再催促

オランダ人に聞いた沈め方は両家の手には負えないと、石本幸四郎田口惣兵衛に言ったところ簡単ではないことなので出来るかどうかわかりませんがそのことはお答え申し上げますとの返事 419下

この事を宿老森又左衛門に聞いたところ頑張りますとの答え 420上

石本幸四郎田口惣兵衛が絵図を持参 大名持場の朱引 人数 駆け引き(兵の進退)の模様 奉行の率いる隊の寄せ付け(動き?) 空船はこちらで準備 沈める役割は佐賀の持場 年番である佐賀に命じるべきと一同評決し即刻品々人数分など用意すべきと申し上げる 420上

右の船沈め方につき関傳之丞を呼び出し命じたところすぐに深堀役人に伝達いたしますそれについては空船不足なので深堀に廻着しているしている船も召し上げ並びに借りていただければ都合が宜しく早速間に合わせるようになりますので非常時に付き御用(で召し上げる)の旨船船に命じられると直ぐに利用可能となります。尤も先刻空船御用(召上げ)については盗賊方改10方に指示したので最早船船も承知している。有無に拘らず取り上げ利用すること精を出せと命ず 420上

地下宿老林伊三太に 佐賀屋敷番頭米倉権兵衛も了解しているので遅延無いよう励め口頭で催促 入魂(ジユコン)前もって了解してもらっていること 見届け催促しにすぐに発つ 420上

薩州細川有馬三家軍役揃い願書持参 先年より願いを出している用達の者帯刀の件今蔵屋敷手薄なのでご許可いただきたいこと即座に許可 420上

薩摩聞役上野善兵衛より現在町乙名その他一統帯刀許可が出ているが三家の用達の者は主家より扶持を渡し国許往来の旅行時は名字帯刀を許されている往來のことに理由ないことでもなく特に現在国許よりまだ人数も到着せず蔵屋敷は手薄であるのに願い書を即座に差し戻す(却下?)はなぜと聞かれるので答えたのは先年より願っていたがなかなか聞き入れてもらえず今も許可はない扶持方お恵み旅行大刀の件は御手切のこと奉行所承知の上は咎められることもありこの非常時追ってお願いと申し捨て引き取る 420下

林伊三太米倉権兵衛とくと示し合わし右場所張切り一条も話し大綱送り方は直ちに深堀へ遣わしたと聞く 420下

右の件境宿老高木藤一郎を呼び出し大坂堺廻船の碇綱を至急集め林伊三太へ渡すよう命ず 420下

藤左衛門?が手下を寄こし 中村継次郎取扱について自分の書面で返事を遣わす 421上

木部幸八郎御番所から戻り様子を報告 再び出かけ程無く山田吉左衛門花井常蔵も帰り直接話す 山田吉左衛門は留まり花井常蔵は遣わす 421上

8月19日松平図書頭御届 内容略 4 紅毛人を戻さず出帆するようならこの船を打碎するよう松平肥前守、松平官兵衛に命じた 番所その他嚴重に警備するよう命じた 夜六つ時過小船28艘に280人乗組み港内に乗り入れたとの注進が来たのですぐに召捕らえるように両御番所に検使を派遣して指図した なおまた長崎に詰める聞役にも命じたところ夜中のためしかと

分ならず小船乗り帰り対決しなかった。このため大村上総介にも人数差し出し陸地警備するように命じその他近国諫早聞役にも同じことを命じさらに異国船が増えるようならば人数差し出すよう命じた詳細は調査の上連絡申し上げる。421上

文化五年八月十六日或書状 謀藩の聞役 陸手の警備は西役所、その前には市中火消共詰め唐紅毛通詞乙名帯刀御免で受け持ち場所を固め波止場には土俵竹束を山のように積み上げ町年寄は8人ずつ率いて備え市中海岸には乙名ども備え稲佐の御代官所一手に固め陸手は随分嚴重に見えたが沖の異国船の近辺には船一艘の備えも無く御番所より沖には警備船も漁船も見えないこれについて御奉行も至って気にかげ兔に角しているうち出帆させてはと両御番所に催促したが少人数でいつ出動するか分からないということ。但しこの少人数はオランダ船が今季来航せず季節外れになったので野母遠見番所並びに地役人出迎えの役目の者ども無駄な出費になるので引き払うということで両御番所警備人数も先月限り引き払うよう仰せ渡せられたので僅か武士20人足軽20人余その他の者も併せて百人に満たない人数で船も7艘ほどしかなく兔に角佐賀より人数が出動しないと相調かたき由である。異国船は極めて大型でオランダ船とは形が違い軍船と見える。石火矢2段に構え百挺八十挺五十挺とも噂され誰も近寄らずしっかり観察したものはおらず噂があれこれ飛び交っている。積み荷は特にならぬ。これは私自身が見たわけではなく色々な噂話を書き取りしたので間違いもあると思うことはお断りしておきます。今十六日辰の中刻(午前7時から9時)の様子です。引き続き報告します。421上 この文書は16日差し出し15日の日付で16日に送った注進

同月十八日長崎出或書状 八月十六日なおまた嚴重に御手当 大波止に石火矢の他砲術薬師寺久左衛門受け持ち稲佐山両所を一隊薬師寺又三郎一隊は御代官御舍弟に命じられ沖の両御番所には石火矢数十挺を備えた422下

### 通航一覽卷 258 21ページ

#### イギリス国部七

狼藉始末 八月十六日異国人願いの品を与えるとおランダ人一人を返しホウセマンこれに託してまた薪水を乞い許可ならシキ11シムルを返すという奉行オランダ人を返せば薪水を与えんとあるは引き換えにと言う異国人願いのことは(我が国と国法に)不敬なので奉行直ちに焼打ちの準備をして何度も肥前筑前に増援を促すが遅々として進まずオランダ人(ドワーフ)の願いもあるのについて薪水を与える。異国人全オランダ人が恨みの対象で日本が敵ではないすぐに出帆して以後船を寄こさない由オランダ人が訳出する。異国人日本国法を犯したこと証書をもって詫びるとの記録もある。423上

8月9日或書状 某藩聞役 異国船に望みの品々届けたところすぐに紅毛人を返しなお要求するには感謝しているがなお不足の品々届けば残りの一人も無事に返す由 薪水 葉煙草 梨(レモン)のつもりか? 唐芋 戻された紅毛人に言い含めたため御奉行所一体の様子お尋ねしたら次の通り。オランダ人の証言 私ども捕らえられ本船に引き上げられ数十人が取り巻き鉄砲剣を突きつけて尋ねるにはこの夏バタバアより出帆したオランダ船2艘はこの地に渡航し今どこに係留しているか直ちに全てを申せ。もし嘘偽りがあれば直ちに刺し殺すということをおランダ語で言うので元より入港はしていないと答えたところすぐに端舟三艘で一艘に9人ほど乗り込み剣や鉄砲構え港内各所探索しました。ほとんど戻りそれから以前の扱いは変わって料理など用意するなど丁寧に饗応されました。その後は危害を加えるような様子はありませんでした。ここに不思議なことは端船が帰った際に日本の衣服大小紙入れ財布かお持ち帰り艦長に差し出しました。これは深堀から佐賀屋敷に飛船を出した際424上小舟で遠方の浜辺を漕ぎ来たのを端船が港内探索に出た時だったので剥ぎ取ったように聞いて聞きました。

船は極めて頑丈な三層構造でいざれも兵士の趣きで皆剣や鉄砲持っておりました。石火矢はもちろん大筒小筒数百挺を備えており乗り込み人数300人余と話しましたが私の見たところでは300か90人ばかりと考えました。艦長は26歳の由でございませす。乗組員のうちオランダ人は9人ロシア人とおぼしきもの45人諸国から集まったもの45人ずつその他は官長をはじめみんなイギリス人と見受けました。積載物は少なく兵糧分ばかり武器ばかりで全く軍船でございませす。海賊とは思えません。423下

尋問が済んだオランダ人に返事を持たせる 要求はわかった 拉致した阿蘭陀人を戻すのと引き換えではなく戻せば品を届けるもし遅れると我國の法に則り動くことがありうる そうすると大変な事態になるのでとにかく早く戻せ それに同意してか  
**亥下刻夜二時**の人の阿蘭陀人を戻した その交渉中に密かに焼討ちの準備 たとえ阿蘭陀人一人が帰らなくても日本の武威には替え難い 佐賀大村に何度も催促し続けたが 遠方からなのですぐにはいかず奉行は悔しいばかり たとえ軍勢無くてもこのままにしてはおけぬ まず市中騒がぬようお触れを出し 奉行少人数の供で配備の場所を見回り その後は奉行始め家中並びに年寄から地役人まで備えいずれも甲冑で奉行所に詰め もし明日佐賀勢が来なければ奉行所の人数と地役人を率いて攻める支度が整い大波止には奉行の乗船を用意させた 424上

**諸藩の人々も15日大波止に集合し命令あれば行動すると報告しているが 僅か一艘のことなので諸家より加勢はいらない。**  
らに異国船が増えればその時は指示する それまではお控え願いたい 唐津藩へは兵を出すよう申し渡したと申し渡した由  
424上 **奉行の諸家への虚勢か？**

八月の日或書状 捕らえられたオランダ人二人を取り戻すように検使を出し通詞に聞かせたところ簡単に返さないカピタンより船中の食物など渡せば返すとのことでカピタンより牛二匹豚など送りその他お役所の命で米水など送った16日一人ずつ返し無事終わった 425上

16日夜は北風激しく焼討ちにもついでい 俄にその準備として御乗船も大波止に周りを張り奉行所の人数はもちろん市中お供の人数も揃い始めたが聞役には何ら通知が無い 夜半過ぎに中止か少し穏やかに無事に済んだ 17日早朝聞いたところでは奉行所のみの手兵で出動は例が無い 俄に佐賀に焼き討ち命じたが在住の役職の面々が役所に参上して言うには御番所の人数が少なく佐賀より出動の筈だが今夜一人も到着していない今の人数で万一攻撃失敗したら面目にもかかわるので佐賀より総人数が来るまで焼打ちを見合わせてくださいとのことで止む無く中止となった 425上

異国船には佐賀より数多くの番船が付き検使や役方通詞も出張していたところ 18日朝異国人主将が検使乗船に寄こしオランダ人二人を拉致したのはオランダは敵国であり日本に通商の船を送っているから**バタバ**に行ったがとくに出帆した由で後を追ったが洋上では見つからず既に長崎に入港済みとみてオランダ人二人を捕らえ尋問したところ今年に入港していないとのこと 洋上でも船を見かけずこれは港内に隠れていると考え端船で港内を探索した**(オランダ船捕獲が目的 当時のオランダ人から見ても当然のイギリス船の渡来の動機)** これについては日本の法律(入港禁令)も知らず誤って入港 オランダ人も返し要求品目も頂いたので出航用意 以後日本へは来ないとの横文字 焼討ちも中止 実は帰帆を命ずる検使到着前に出帆したが 出帆が小舟よりも簡単と驚嘆する 425下

八月の日或書状 佐賀藩番所人数では焼打ちも出来ず佐賀より軍勢到着まで延引申し出たのは兼ねてよりの役目にもふさわしくなく現在オロシヤの一件もあるのに番所少人数とは申し出るとは何たることか 今年にはもはやオランダ船も入港あるまいと内密に人数過半を引き揚げたのはあつてはならぬこと 筑前などもオロシヤ一件のため小早関船荷方なども多数いたのにオランダ船入港無しとして引き取った由 異国人端船三艘で港内に乗り入り大黒町や稲佐にも上陸したが行き来しても御番所より捕らえる船も出さないのは何ということかと散々な評判 426上

文化五年八月十六日 検使上川伝衛門オランダ人書記筆者を連れて夕七時午後一時頃帰りカピタンへ手紙一通差し出す 牛野牛野菜水などを望み叶わなければ港内の唐船日本船とも焼き払うと言う通詞中山作三郎が奉行に申し上げる通詞一同カピタンオランダ人書記を連れて対面所にて直談 傳之進?名村多吉郎が通訳 奉行書状は怠慢侮蔑の文面不埒につき望みの品は渡すな 奉行の本心は即刻出陣して打ち砕きたい 奉行が退出した後カピタンが言うには既にコンパニヤ(東インド会社の印で契約(約束)した以上はいかなることがあっても違約しないという印なので望みの品は是非届けていただきたい)と言っているので品々を用意して高橋忠左衛門中村継次郎が夜中本船に送らせた 見届け役の白木茂十郎が報告 426下

(続) 関傳之丞花房久七を呼び出し書院で直談 異国船よりカピタン宛希望の品を**今晚までに届けなければ港内を焼き払うて**言ってきた **不埒の極みにつきすぐに焼打ちする** **そのため御番所まで出張するからその用意をせよ** **但し人数もない様子なの**

**で蔵屋敷水浦屋敷の有り合わせの人数で行く 人数すぐに門前に集合させよ** 焼打ちの手段についてまだ深堀から連絡なくしばらく「猶予ください」と直答 広間に引き取り同じように言うので(上條徳右衛門へか)それはどういふことが奉行が有合わせの人数とおっしゃるのだからその通り心得よと言うと二人だけで再びお話しするのは恐れ入ります ひとまず帰り重役のものより「猶予をお願いします」と言いつて退出した 426下

(続)唐通詞の年番を呼び出し唐船残らず梅が崎へ引き込めと命ず 427上

(続)(奉行)手勢の行軍行列書を作られ上條徳右衛門受け取り諸者頭に指示 427下

(続)奉行出陣に付き海陸の警備陣、旗、長柄、鐘、太鼓、行列奉行差引、玄関から広間まで隙間なく並べる 427上

(続)勝手踊頭取左久に兵糧準備を命じる 427下

(続)高橋忠左衛門、専ら御出陣の様子御諫言致しますと言いつつのでまず私上條徳右衛門に言えと言いつつと落涙して御留守宅御老母の心配をして諫言申し上げますと言いつつので委細分かった案ずるなど言いつ聞かせる 427上

(続)ホウセマンを連れ望みの品々とともに御役所付を付けて七時半(午前午後5時)遣わす 今回は望みの品と紅毛人引き換えになるので格別注意するようにと沖出方中へ中村継次郎上條徳右衛門連れ合わせてせんし切り紙細工遣わす 427下

(続)小比賀慎八を呼び出し稲佐へ出張中の高木道之助に伝えることあるので申し渡したところ夜中に行けと(奉行)直達があったので即刻出発 427下

(続)上川伝右衛門 波止場並びに俵物役所唐人屋敷其の外諸所見回り 427下 **上川伝右衛門 検使に出ついな**

(続)先刻関傳之丞花房久七に直達して出陣を命じたが返事なく重役の者よりも挨拶なく延びているので承知しているのかと上條徳右衛門が手紙を遣ったところ返事が来た その返書は曲淵甲斐守に引き継ぐこのような両家の不始末に奉行残念骨髄に達し頻りに出陣を急がされたので従者の面々心外至極 しかし大村信濃守も未だ長崎に到着しないので陣屋市中とも人がいず是非もなく手勢だけで焼打ちの覚悟を固めれば(高木)道之助に「内談して??御名代で私が参りますと再度申したが一向」返事なく 427下

(続)程無く両人が参上して言うには焼打ちの手続き手順未だ深堀から届かず焼打ちには仕組方法がありますから延期の件御奉行の出陣をお停めするのではないか焼打ちの仕組方策はいまだ整わずお供の人数も国許より来着せず私どもは聞役で軍事の事分かりませんとの逃げ口上なので直ちに筆墨を取り寄せ面前で彼らの言い分を書き取り混乱取り乱す?事多く齟齬うまくいかなごとも多ごというのを聞いた書き留めておく 両人に見せその通りと確認させその書付けを保存した 428上

(続)これは大事なものでの証拠ともなるので間違いのないよう書付を保存して曲淵甲斐守に引き継いだ 428上

(続)この次第いで人数手薄焼打ちの準備も出来ず愁一なまじいに 無理をして攻撃し港内を焼き払われてはこの上なく無念なので検使の者にもそのことを伝えよと山田吉左衛門に申しつけて御番所に詰めている人見藤左衛門其の外にも希望の品々を異国船へ送り残りのオランダ人を取り戻したら即刻出帆しても手を出さぬ出帆させよと申し遣わす 428上

(続)ホウセマンを連れて花井常蔵菅谷保次郎が参上し無事に引き渡したので受け取りすぐに菅谷保次郎が連れ帰った 詳細に報告した 428下

(続)異国船が港内に乱入した次第オランダ人二人に聞いたところ異国船は八か月前680人が乗り組み本国を出てベンガルに寄港 オランダ船が一艘船出して渡来した由聞き当地までも遠征して妨害する計画で渡来 オランダ人を謀計で拉致した イギリス国は横文字も違う国で通信の便利のために捕らえたが日本に不敬をする気は決してなく今年にはオランダ船が渡航してないとい聞けばすぐに出帆しようとしたが薪水食物など乏しくなったのでこれらを乞い受け取ればオランダ人二人を戻すすぐに出帆する 再び当国へは来航しないと言つ由 428下

(続)書記役オランダ人二人を取り戻したのでオランダ本国は敵国というから嚴重に取り扱うべきとカピタンの考えもあるからしっかりと遠慮なく答えよと大通詞中山作三郎に尋ねさせたら考えることについて横文字一通差し出したので和訳を命じた

(続)ドゥーフの手紙 異国船は日本に狼藉に及ばず書記役二人を無事に返したので速やかに出帆を命じられ当港にみだりに乗り込んだのは許せないことですがこの度は堪忍許していただきたく また今敵しい処置をされればイギリスとロシアは同盟国であり二国の恨みが倍加し交易の障害となつて私どもも困ることになります その上日本を恨み今後漂流もあり(日本漁民の?)得ますので穏便なお取り計らいが万全と思えます 429上 ドゥーフにしてみれば一刻も早くイギリス船を出航させないとオランダに関わる秘密が露呈するから

(続)関傳之丞よりこの度来航した異国船端船に乗り込み港内を乗り回した由 これからは異国船滞船中は夜中は御用船意外は通しませんとの伺い書を差し出す その通り命ず 長崎秘記 429上

文化5年イギリス船主艦長からの手紙 昨日旗合わせに来たホウセマンとシキンムルを本船に無理に連れ込んだのは航海中に食物が払底したので今日その食物をお願い準備して貰えるようホウセマンを一人先に上陸させました だからもう一人残るシキンムルも食物が届いたら返し直ちに帰ります。もし今日中に食物が届かない場合は明朝日本船も唐船も焼き払います。イギリス船主 429上

昨十五日ご当地高鋒島前に碇を入れたイギリス船主よりオランダ人書記ホウセマン申し上げた内容

本船人数二百五十人(350の間違ひ) 今般当地に来航したのは申し上げた通りイギリス国はオランダ国と敵対しておりご当地へも後を追ひ(慕い)妨害する計画で来航しました。書記オランダ人書記二人を召捕らえたのは通訳に使うためで貴国に不敬のつもりは全くありません。しかしこの数日洋上で薪水不足になり不和の国ではありませんが難儀しているので阿蘭陀カピタンに申し伝えるため留置したオランダ人に書状を書かせ送りました。薪水食物を早速に頂ければ有難く存じます。そうしたらオランダ二人を返し速やかに帰帆し二度と貴国へ参りません。恐れながら御礼申し上げます。これはイギリス船主の言うことをホウセマンが申し上げました カピタン ヘンデレキドゥーフ ドゥーフ 辰八月十六日大通詞 小通詞 カピタンはなぜ来ないのかと船長が尋ねるので病気のため来れずと申し上げた 本船は三百五十人乗組みとオランダ人の言うのをカピタンが申し出た

14  
429下

八月十六日 同年9月2日オランダ通詞名村多吉郎書状日付は江戸に着いた日 イギリス船につきカピタンの存念を書いた書状の訳 申し上げた通りイギリス国は敵国ですが今般当地までも後を追ひ妨害しに来た件カピタン嘆かわしい限り しかし今後のことを考えられ彼の船の出帆を差し止めるにつき敵しく命令されたとのこと 私の考えを 大変ご厚誼を賜り重々ありがたき幸せ 私からお願いを申し上げるのは今般当地までも来たのは私どもを追ひ妨害に来たと敵国の者が言ったと聞きしかと申し上げ難い しかし薪水の必要船主が申し出たこと私よりもお願いしたところ品々を下されご恩義に感謝しお陰で召し捕らえていた者も返し 船主も船より降り立ち厚く御礼申し上げ早々に帰帆し再び来ないとの事 しかし敵しく命じられれば格別動員御手当などを命じられる事でしょうが万万一にでも船が被害を受けて帰帆することになれば諸事の害となりますので彼らの言う通り早々に帰帆させるようお願い奉ります(ドゥーフにしてみれば一刻も早くイギリス船を出航させないとオランダに関わる秘密が露呈するから) カピタン ヘンデレキドゥーフ ドゥーフ 430上

訳出 **茂傳之進 加福喜蔵** 石橋助左衛門 中山作三郎 名村多吉郎 今村金兵衛 横山勝乘丞 今村才右衛門長崎異事録視  
聴草 430下

文化五年八月十八日長崎出或書状 八月十六日**御奉行所家老**其の外役役がオランダ人二人を取り戻す為に異国船に乗り移り説得の上漸くオランダ一人を取り戻し薪水野菜肉類望みの品ある由少々与えたと残る一人も戻した これは異説 オランダ人を返して後望みの品を与えたが他の書状に詳しい 異国人より横文字で二か条願ひ出た もし二か条駄目なら是非一か条許して欲しくそれも駄目なら今晩長崎を焼打ちする 返事をわざと引き延ばし同夜中こちらから焼打ちすることに決その役目を肥前佐賀にしたが彼方よりのお請には未だ人数が到着せず只今有合わせの人数でもし打ち漏らしたら申し訳ないの人数揃うまでご猶予くださいと佐賀の御付き人から申し出た由 しかし御奉行には至って急き込み御役所の手勢だけでも焼

打ちするとご決定された由 横文字の願い二か条共に許さないと長崎中を焼打ちすると認められたが警備を嚴重にしたのを見て異国人の勇氣が萎え横文字のご返答も受けないうちに帰帆したようで臆したか 431上

一同オランダ人二人が異国人大将と対したら凡そ七十八と見え御番船(旗合わせ船か)に行ったのはオランダ人には数年来の遺恨があり今般ジャカタラに行ったらオランダ船二艘が最早出帆したというので洋上で捜索したが見当たらずご当地に来ているオランダ人二人を捕らえて尋ねたところ今年は来る筈で待つていたが未だに入港無しと白状したが怪しいため端船で港内隅々まで捜索した 国法を知らず不調法に至った この誤りを詫びる証文を出し明日出帆し再び渡来しないと申し出た 431下

八月廿七日肥前国主松平官兵衛家人届出江戸着の日付 口上覚 長崎に渡来した異国船の様子去る十六日松平図書頭様彼の地にいる家来が参上したところ異国船に検使を送りオランダ横文字で尋ねたところ薪水が不足しているのでこれを与えれば引き換えにオランダ人を解放すると申し出た これによりまた検使を遣わしてオランダ人受取と薪水を渡すよう取り計らうもしオランダ人を戻さず出版するなら打ち碎く旨申し越したので追つてそのための人数送り出すと江戸官兵衛に申し越した国許家老からの連絡 松平官兵衛家来 関札 432上

同日唐津聞役小林大登方よりの風説書 (唐津藩聞役による佐賀藩などの対応の情報)

今般入港した異国船は最初オロシヤと思つたがオランダ人画横文字を送り先方からの答えからイギリス船と分かつた その大船には三百五人ミス乗組み端船六艘積み込み二艘は本船と言つて不明 その大船の取り回しが巧みで当地海上地理良く分かつている ために神崎沖に碇を入れた こちらより旗合わせオランダ人二人検使が出たが向こうもオランダ旗合わせを所持していたのでオランダと思ひ通詞も紅毛詞(相手もオランダ語の意味か?)端船に乗り込み日本船へ漕ぎ寄せオランダ人一人を端船に引き込み残り一人を引き込もうとしたところ通詞が渡さないとしようとしたら剣を抜き胸に当てこうなるぞと言つたがそれでも渡さないと言つとそれに怯えたか?船頭たちは怖がり水中に逃げ行った 直ちに本船へ引き取り検使の者は遠方に控えていたがこれも逃げたとの風聞あり そのことを御役所に報告した処オランダ人を奪われて済ませるな取り返せとの命令にまたまた出かけた中々渡さない その後は端船三艘で港内諸所を乗り回し万屋町方面へ乗り回し剣など抜いたとの風説がある 警備の人数が来ればまた漕ぎ出して稲佐に上陸したが大勢が出たのでまた漕ぎ出して出島水門に来てそれから帰った カピタン始めオランダ人は残らず出島を逃げ出し西御役所に御朱印を取られないよう持参した由 そのためその先は西役所に留まり休止場には両組の者石火矢で警備した この異国人御役所に来るなら決して上げるなど命ぜられたが先方より手向かいしなければこちらより手向かいするなど指示された その夜は何も起こらず異国人も引き揚げた 432上

(続)翌日検使を遣わしたが兎に角オランダ人は戻さず願ひ出たのは牛野牛野菜米を呉ればオランダ人を返すというのでオランダ人が先に戻り願ひの品を返すべきかいろいろ議論があつたが昼過ぎオランダ人一人を戻しもう一人は戻さず夜にもう一人を戻し牛二匹野牛の数は分らないこれはオランダ人から差し出した 米野菜も渡した 今日十七日水など汲み屋後早々に出帆した 軍船だと言つ 積み荷は無く飯米に不自由した由 これから広東へ行くので食料を調達した 船上には石火矢筒40挺が見え上下二段に配置 その他にも小筒など多く所有し石火矢筒には弾込めがしてあつたとオランダ人が申し出た 433上

(続)これは町年寄筋から聞いたが今般入港したのはイギリス船だと言つ オランダの敵国でバタバアへも行ったがオランダ船二艘が先だつて日本へ行ったと尋ね聞き端船で捜索したが見つからず願ひを早々に聞いてくれれば捕らえたオランダ人を戻し出帆すると神妙なので望みの品を与えた 牛二匹野牛野菜など貰つて早々に出帆した 433上

(続)佐賀公についてはどうしたのか準備せず人数も出ない そのため警護担当部所は手薄でこの度大不評となつた御役所よりは聞役に度々催促したが一向に人数揃わず今般ようやく出た由 兼ねての御手当とは大違いで後の祭りでした 大村公の警備場所も大浦と言いますが聞役呼び出し神崎の警備肥前佐賀の人数少ないため右の場所へ加わり警備するようご指示があり

物頭二人其の外大勢ですぐに警備についた 人数もようやく出揃ったが最早異国船は出帆し、神崎は取りやめ大波止警備を指示された 私に御役所へ行くと警備してあり各自陣羽織野袴 騎馬武者も六、七人いた 今晚大村公この地着の予定が晩にも着かず虚説もあるがあらまし聞いたところを書いてお目にかけます 八月十七日 433下

通航一覽 259 イギリス国部 八 434下

狼藉始末

八月十七日 検使がイギリス船にいき出帆を命じる 浦触れ沖廻りは奉行が兼ねて指示していた この日未刻(3時から15時)出帆か？ 帆影を見ず在国在邑の大名その他に連絡し人数も引き取らせた **その時になって深掘当番松平肥前守の焼打ち準備成るの報告**が来た 434下

八月十七日 虎の上刻午前3時御用状発送 434下

(統) 曲淵甲斐守旅中へ刻付け町使出発 434下

(統) 勘定奉行主膳正へ刻付け町使出発 434下

(統) 五島大和守異国船渡来につき御用があれば仰せください 434下

(統) 諫早豊前人数到着の届 豊前は病気の由で参上せずと届け出 434下

(統) 福岡藩聞役花房久七が交代のため参上したところこの度の事件で二人とも奉行所に詰めたこと久七付添参上 奉行？会われた 435上

(統) 頭取乙名に指示有るため乙名共呼び出し婦人の船遊山はもちろん漁師でも女は出るなど指示

同じく御代官手代を呼び出し指示 同じく船改め方へも指示見廻りを命ず 435上

16 (統) イギリス船出帆申し渡しの際検使は中村継次郎菅谷保次郎 御番所に立ち寄り万一乱暴があれば打ち払う手筈を命じそれより本船に向かう 横文字を持参 自船を渡す積り？ 但し異国船へ望みの品を与えたところ牛不足のところ約束の通り一品たりとも足らず港内そのままでは出帆出来ないで早々に揃えて貰いたいと申し それなら例え出帆申しつけても出帆しないのではと案じていたところ夕八つ時頃(午前二時 午後二時)少し風が出ると直ぐにくると船を廻し帆を三つかけ矢の如くに出帆 野母までの七里の間は帆三つ 野母より五島まで帆五つ 五島浦より帆十かけ忽ち帆影が見えなくなった **始め約束の品一品たりとも不足があれば出帆しないと奸計か？** 435上

(統) 諸家聞役一同呼び出し大浦触相達す 435下

(統) 盗賊方船改方隠密方 沖見回り命ず 435下

(統) 小瀬戸遠見番より申の中刻申の方にあたり帆影が消えたと申の下刻届け出 435下

(統) そのため諸家聞役一同呼び出し帆影が消えたと遠見番から届け出があったので在国在邑へ報告するよう命ず 435下

(統) 大村家警護陣に引き取りを相達す 435下

(統) 高木作左衛門と高木道之助に引き取る様手代呼び出し相達す 435下

(統) 調役町年寄同断 435下

(統) 御役所詰め後藤惣太郎へ申し渡す 諸向き出方それぞれ引き取れ 夜中または翌朝までに引き取る積りで夕方までに引取が届け出が続く 435下

(統) 帆影が消えたので地役人一同帯刀は今日限り 明日より平日の通りに心得るように向々に申し渡す 長崎御使所用部屋

日記 上条徳右衛門 435下

(統) 調御役所詰め後藤惣太郎へ申し渡す 436上

右の本文の通り甲斐守に引き継ぐので御代官御勘定方其の外一同へ見せ三名に認め差し出せるところ忠左衛門は一向に御用向き取り扱い出来ないで除名し木戸幸八郎も御番所へ出張中のため詳細分からないので除名と申され一名にて書き出した

甲斐守が着任すれば手当なども致し置くべきかと尋ねられ下書きのままでもいいから早く見せよと仰る。この度の件は評定所（裁判）沙汰になるだろうとだれもが噂した但し右一名日記そのままに甲斐守の跡調べ江戸伺になった由 436下

右の書面在所に在る**老父三久**長崎大変と知り心配だと袴上下断ち切り下書きの下書きをそのまま出したところ今未年病気で信州松本在山家に湯治していたので糺したら右の書付が出たので長崎開国以来の大変なので本文の外覚えていたことも取り混ぜて書いておいた。先年江戸にもどった際巨細無く諸書物を取り認めイギリス船の図なども画工に命じて作って持参し養子**松平伊織**に差し出した。その頃**大目付の中川飛騨守**が内密に三木新左衛門と言う家老を寄こし主人近日中に内々に尋ねたいことがあるのでそのように心得られたい。今度の一件のことであろう。伊織に差し出された諸書状を下ける。よようと申し渡したら何れへ紛失したか見つかりません。他日の心配も水の泡誠に嘆かわしい人物 436上

出帆の様子を楼上から奉行の後に望見したが船は速やかに走り出し奉行は遺恨の表情で即刻楼を降りたので後に続く居間へ行き滞りなく出帆も済んだ。しかし**御用状(幕府命令文か?)にも次第により焼打ち致すべしとある**が無事の出帆は無念だが両家時節を計りにんずう引き揚げ火船の準備も出来ずどうしようもない。御役所はカピタン内意(の情報?)で在国在邑へ連絡しそれより台場警備 軍船手富準備 出帆の浦触れ **何一つとして手抜きは無い**。焼打ちできないのは仕方ありませんとそれとなく(諷諫)諫めたのは其の方万端骨折りが苦勞であった。江戸に帰ったら御持ち御先手への転役になるだろうと頻りに詫状を認められた 436下

関傳之丞より異国船今十七日午中刻出帆した。御番船伊王島辺りで警備していると深堀役人から報告あったと届け出 436下 同人(関)が言うには昨日お尋ねのあった**焼打ち手順**は神崎高鉾島山上より石火矢を打ち続け自然引き払い出帆する頃に陰の尾山あるいは神島伊王島などに配置してある石火矢を打ち続け船で追い打ちを仕掛ける書状を差し出す 437上

八月十八日或書状 十五日夕渡来の異国船は昨十七日帰帆したので領内浦々警戒するように命令書が来たので即飛船で連絡し準備した処またお呼び出し異国船は洋上帆影も消えたと遠見山から申し出あとの船も無いので今般各国から人数出動の<sup>17</sup>御手配も必要なしと各国へ連絡され十四家聞役一同に仰せられたので港や市内各所の警備藻引取御蔵屋敷の警備も昨夜引取この件今日茂木から飛船で御用人方々に連絡 437下

(続)異国船はどの国のものか俄かに分からなかったがイギリス大国の賊船ということだがイギリスは日本渡航禁止なので表向き連絡もなく?異国船で済ませた。乗組員三百五十人積荷無く石火矢多数搭載とのこと 437下

同月十九日**松平肥前守佐賀藩主届出** 十七日異国船帰帆と申し渡され領内念入りに警備を書状で相達す。出帆の際に警備見送り船については例年の異国船出帆と心得勿論浦々で不法の行いあれば石火矢を持って打ち砕けと、昨十七日出帆し帆影が見えなくなったので警備に出動した諫早豊前其の外出動した人数引き取れと松平図書頭(敬称無)より言われたので引き揚げ長崎に配置した家来へも伝えました **私も出動せず** 届出します 十九日 437下

八月二十日黒田甲斐守肥前**秋月の城主** 書状 十五日長崎に異国船一艘渡来に付き松平官兵衛名代として彼の地見廻りに行けと松平図書頭殿より(敬称付き)使者が申しつけ今日在所を出発した。折柄ちようどその時去る十七日図書頭殿に長崎に配置している官兵衛家来を呼ばれ今般入港した異国船に命じるので領内浦々警戒するように書付を相達す。同夜官兵衛家来を再度呼ばれ異国船は神崎沖に暫くいたが同日出帆帆が見えなくなったと注進があったので番方(役目の)警備人数は出動に及ばずと相達(あいたつする)承知しました。このように帆影も消えたので私は現地見回りは中止しました。この段**御老中に飛札で報告**します 黒田甲斐守印 438上

八月廿七日長崎出或書状 十七日沖異国船が出航した時は御役所の火の見脇高き物見から図書頭殿異国船が帆を掛けるのを遙かに見て**飛び上がり残念がり小身でこんな重役職をお受けしたのは今更ながら後悔すると齒を食いしばり落涙されて残念がられた**由 438上

(続)但し異国船に捕らわれたオランダ人二人に異国人からの書付一通 紅毛オランダ人(ドーフ)から平穏な取り扱い願いの書付一通 異国船が差し出した横文字の和訳一通 添えます 438下

九月二日松平主殿頭島原城主(十四家の一つ) 十五日長崎に渡来の異国船 続く船があれば指示するの命があつたが最早出帆を命じ帰帆したので人数手当に及ばず 帆影も消えたと現地配置の家来に松平図書頭(敬称無)相達 438下

この日大村上総介軍勢を率いて到着 異国船既に出帆したが奉行指図で暫時波止場を警備

八月十七日 大村上総介到着 対話に参上したいと聞役松浦鐵十郎申し出 同人西役所居間でお会いし(奉行?上條徳右衛

門?)即刻退去 **当人は麻袴 共は総て陣羽織着用** 鐵十郎参上し人数すぐに参りますので警備場所をご指示ください 波止場

警備を命ず 439上

(続)大村上総介聞役松浦鐵十郎次の面々と同行して御役所に参上 最早帰帆したので波止場警備はと聞くのですぐに警備を命じた 侍大将大村右近 用人大村永宇 物頭松田土佐之允 出帆後の警備ではあつたが早速出動した件ご報告されたので御調の上御褒美 長崎秘記 439上

八月十七日或風説書 午上刻 大村様御出陣されたが最早出帆したので波止場で陣を構えた 一時ばかり警備され程無く御帰城され地役の出動も引き払つた 439上

八月十八日長崎出或書状 大村上総介様 昨十七日御奉行所に麻袴にて来られお供廻り陣羽織着用大波止並びに大浦両所警備され**立派な有様 小藩ながら行き届いて軍勢が整っていた 公方様ご機嫌伺いに付き麻袴ご着用** 439下

八月十八日或書状 大村上総介様昨十七日七つ過ぎご到着直ちに御奉行所に参上されたが最早帰帆したので御屋敷に引き取りしかし**先手の物頭組は大波止で幟幕を張り警備した頭役は総て陣羽織野袴具足箱(籠)一つずつ 足軽と供廻りは半纏目印羽織 上総介様は袴でお供廻りは陣羽織野袴でした 御家老は馬上で陣羽織野袴 手廻り二十人余と見えた** 大村様御奉行所へ来られた時は私共も大波止に出ていて御役所に参上し良く見届けました 439下

八月十七日 大村上総介御届 昨十六日長崎渡来の異国船そのままには出来ないのでは同夜焼打ちする積り(計画?)なので松平図書頭(敬称無)から出動し**御奉行所空いているので私は甲冑支度で参上し御奉行所を警備守備するよう**現地家来に図書頭<sup>18</sup>から相達あり今子中刻承知 これより早速支度し領内時津に渡る積りで今晩寅の刻出船することをご報告 十七日大村上総介 439下

## 9月18日朝作業

--- Page 22 ---

これは深堀から佐賀屋敷へ飛船で

小船で遠方の浜辺を漕ぎ来たのを端船で出動していた湊改が剥ぎ取つたもの(本来は奉行所への通知ではない)

--- Page 29 ---

Note (yellow):

大村藩到着 侍大将 用人 物頭 の名前

Note (yellow):

大村藩軍勢の出で立ち衣装

Note (yellow):

松平康英切腹江戸注進状及び5箇条の書付  
御黒印御下知状 曲渕に渡す

Note (yellow):

松平康英 徳右衛門と手を握りあつて落涙

Note (yellow):

松平康英の素顔 話し好き 手附給人等酒俳句もたしなむ 短気か?

Text (red):

松平康英の日常

Text (red):

辰砂しんしゃ硫化水銀 丹 洋紅色

Note (yellow):

<sup>19</sup>『周禮』天官冢宰<sup>二</sup>の鄭注に「五毒、五藥之有毒者」のひとつにあげられる<sup>三</sup>など、中国において古くから知られ、鍊丹術などで水銀の精製の他に、赤色(朱色)の顔料や漢方薬の原料として珍重されている。

中国の辰州(現在の湖南省近辺)で多く産出したことから、「辰砂」と呼ばれるようになった。日本では弥生時代から産出が知られ、いわゆる魏志倭人伝の邪馬台国にも「其山 丹有」と記述されている。古墳の内壁や石棺の彩色や壁画に使用されていた。漢方薬や漆器に施す朱漆や赤色の墨である朱墨の原料としても用いられ、古くは伊勢国丹生(現在の三重県多気町)、大和水銀鉾山(奈良県宇陀市菟田野町)、吉野川上流などが特産地として知られた。平安時代には既に人造朱の製造法が知られており、<sup>19</sup>世紀中期以後、天然・人工の朱が中国から輸入された。

伝統中国医学では「朱砂」や「丹砂」等と呼び、鎮静、催眠を目的として、現在でも使用されている。有機水銀や水に易溶な水銀化合物に比べて、辰砂のような水に難溶な化合物は毒性が低いと考えられている。  
辰砂を含む代表的な処方には「朱砂安神丸」等がある。

辰砂紙 写真を見よ

Note (yellow):

ザンゼン 告げ口陰口中傷

Note (yellow):

聯(読み)れん

詩句または絵をかき、また彫刻して、柱や壁などの左右に相對して掛けて飾りとする細長い板

Note (yellow):

連子【れんこ】

窓や、戸などの開口部に棒状の木または竹を縦または横に並べたもの。およびその意匠をいい、縦横に組んだ格子とは区別される。

Note (yellow):

松平康英の口嘗

--- Page 31 ---

Note (yellow):

**松平康英切腹の詳細**

Rectangle (blue)

Note (yellow):

**20 切腹の夜 酒宴あり いつもより機嫌良し**

Note (yellow):

**御黒印 御下知状 曲洩へ持参**

Note (yellow):

奉行 切腹の夜に検使2人をねぎらう

Note (yellow):

切腹の理由 検使の不行き届きは自分の不行き届き

Text (red):

江戸を発つ前に指示があったのか

Text (red):

横家 官舎 神官の住居

Text (red):

葉戸 窓戸

Text (red):

切腹の夜

Note (yellow):

安南 ベトナム 安南都護府(唐の南辺統治機関)に由来

Note (yellow):

そんまぢ【×蹲×踞／×蹲居】

うぢくまのじと。しやがむじと。

Note (yellow):

籠(読み)へら

竹・木・金属または象牙を細長く平たくし、先のへりをややとがらせたもの。折り目や印をつけたり、物を練ったり塗ったり、その他いろいろに用いる。

Note (yellow):

鎮台(読み)ちんだい

21

中央から離れた土地におかれて、その地方の政務、軍事などをつかさどった機関。また、そこに駐留する軍隊やその長。

Text (red):

奉行が自分の懐から部下に恩賞を与えた

Note (yellow):

沖よりの襲撃に備えよと命じたのに両御番所放置の油断

Note (yellow):

佐賀藩は僅かの人数のため舩に自由に徘徊させた 不備を見逃した奉行の責任

Note (yellow):

相手に言うままに差し入れ焼き打ちが出来なかった責任

Note (yellow):

大村藩があつた時間早く着き諫早の援兵もあれば焼き打ちできたが大村藩の到着には責任は無い

Text (red):

図書頭の遺書の詳細

Text (red):

4時間

Text (red):

曲淵も旅を急ぐ

Text (red):

**黒田家8千人を動員**

Text (red):

**黒田源左衛門 尋常ならざる人物 軍船80艘を率いる**

Text (red):

長崎旦那方内々に切腹を知る

Text (red):

遺書 家来臆病に検使のこと

22

Text (red):

肥前番所 通航を許す

Text (red):

番所の人数不足を確認しなかった

Text (red):

無礼な異国船を打ち払えなかった

Text (red):

奉行には大身が妥当

Text (red):

筑前 遠方から駆けつける

Text (red):

黒田源左衛門 家老の男気快気

Note (yellow):

図書頭の遺書の詳細

Note (yellow):

遺書 家来臆病<sup>22</sup>検使のこと

Note (yellow):

肥前番所 通航を許す

Note (yellow):

番所の人数不足を確認しなかった

Note (yellow):

無礼な異国船を打ち払えなかった

Note (yellow):

奉行には大身が妥当

Note (yellow):

<sup>23</sup>曲淵も旅を急ぐ

Note (yellow):

長崎旦那方内々に切腹を知る

Note (yellow):

黒田家8千人を動員

Note (yellow):

筑前 遠方から駆けつける

Note (yellow):

黒田源左衛門 尋常ならざる人物 軍船80艘を率いる

--- Page 33 ---

Note (yellow):

福岡藩は非番ながら18日に軍船荷方船120艘で到着

Note (yellow):

通航一覽260 イギリス国 9

Note (yellow):

曲淵 9月にオランダ人たちに聴取

Text (red):

福岡藩は非番ながら18日に軍船荷方船12艘で到着

Text (red):

曲淵の吟味始まる

Text (red):

オランダ人2人の証言

Note (yellow):

オランダ人2人の証言

24 --- Page 34 ---

Text (red):

曲淵 オランダ人を直接尋問

Text (red):

異国船の武装の詳細

Text (red):

オランダ人1人乗り組み

Note (yellow):

曲淵 オランダ人を直接尋問

Note (yellow):

異国船の武装の詳細

Note (yellow):

オランダ人1人乗り組み

--- Page 35 ---

Text (red):

ペリノー艦長も端船に乗った

Text (red):

イギリス艦への確認続く

Text (red):

ダウンフ 奉行所での尋問

Note (yellow):

ペリノー艦長も端船に乗った

Note (yellow):

ダウンフ 奉行所での尋問

Note (yellow):

イギリス艦への確認続く

25

--- Page 36 ---

Text (red):

佐賀藩 切腹した重田

Text (red): 石橋正明:

佐賀藩の切腹した重田

Note (yellow):

**佐賀藩の切腹した重田**

Note (yellow):

大村藩警固に速やかに対応したとして老中より「褒詞あり

Note (yellow):

佐賀藩 家来怠情並びに人数少なしとして逼塞仰せ付けらる

--- Page 37 ---

Text (red):

支配勘定方 検使の処分

Text (red):

人見荒堀若山荻野は御褒詞

Text (red):

文政

Note (yellow):

支配勘定方 検使の処分

Note (yellow):

人見荒堀若山荻野は御褒詞 賞賛

Note (yellow):

中村継次郎 図書頭が出役を命じたが臆病にも行かなかった

26

--- Page 38 ---

Text (red), 石橋正明:

佐賀藩長崎番頭切腹

Note (color #FFEB3B), 石橋正明:

佐賀藩長崎番頭切腹

--- Page 39 ---

Text (red), 石橋正明:

佐賀藩 切腹の風聞挿む

Note (color #FFEB3B), 石橋正明:

佐賀藩 奉行切腹の風聞挿む

--- Page 40 ---

Text (black), 石橋正明:

## 佐賀藩手抜き理由

Text (red), 石橋正明:

佐嘉藩手抜き理由

Note (color #FFEB3B), 石橋正明:

佐嘉藩手抜き理由

Note (yellow), masaa:

佐賀 米倉権兵衛 福岡 吉田市郎太夫

Note (yellow):

## 諫早勢の到着は17日 佐賀藩本藩からは出陣せず

Text (red):

長崎配置の大筒詳細

Note (yellow):

## <sup>27</sup>長崎配置の大筒詳細

Text (red):

大村勢の詳細

Note (yellow):

大村勢の詳細

Note (yellow):

奉行の許しを得て米倉権兵衛等残らず引き揚げ 筑前大組頭吉田市郎大夫も同じく引き払う よって少人数

--- Page 41 ---

Text (red), 石橋正明:

諫早人数陣備え

Text (red), 石橋正明:

蘭船到着奉行も喜ぶ

Text (red), 石橋正明:

焼き打ち必死に止める

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

諫早人数陣備え

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

蘭船到着奉行も喜ぶ

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

軍勢揃わないので焼討必死に止める

Note (yellow), masaa:

諫早豊前 鍋島家家老は三千石

Text (red), 石橋正明:

ある間役の佐嘉藩の対応と奉行についての報告

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

28ある間役の佐賀藩の対応と奉行についての報告

--- Page 43 ---

Text (red), 石橋正明:

出島カピタンへの贈り物

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

出島カピタンへの贈り物

Note (yellow), masaa:

9月21日佐賀多田邸の書状

--- Page 44 ---

Text (red), 石橋正明:

奉行所の指示 見当はずれが多く市民に不評 佐賀藩ならでは風評と思える

Text (red), 石橋正明:

8月16日辰下刻朝9時さる武家の長崎聞役よりの書状

Text (red), 石橋正明:

風説書も同じ聞役の書

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

8月16日辰下刻朝9時さる武家の長崎聞役よりの書状

Note (yellow), masaa:

ある聞役の佐嘉藩の対応と奉行についての報告

Note (yellow):

奉行所の指示 見当はずれが多く市民に不評 佐賀藩ならではの風評と思える

Note (yellow):

風説書も同じ聞役の書

--- Page 45 ---

29

Text (red), 石橋正明:

**長崎では一時ロシア人ロシア船説も流布**

Text (red), 石橋正明:

**古賀穀堂日誌内の「ホートン」号記事**

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

長崎では一時ロシア人ロシア船説も流布

Note (color #FFEE6B), 石橋正明:

古賀穀堂日誌内の「ホートン」号記事

--- Page 46 ---

Note (yellow):

佐賀藩では徹夜で議論が沸騰した模様 16日

Note (yellow):

17日 佐賀藩より長崎へ百武善左衛門(参政相良内記属官)長崎署吏原口弥左衛門

Line (blue)

Note (yellow):

深堀の人間は泳いで逃げた

Note (yellow):

鎮台(奉行か奉行所)が決戦を布告して江戸と長崎佐賀藩邸に次々と雨のように 先鋒両隊警固両隊即日進発佐賀中が沸いた

Note (yellow):

18日 朝 成富千兵衛田中東兵衛が出陣の先駆け

Text (red):

佐賀藩では徹夜で議論が沸騰した模様 16日

Text (red):

17日 佐賀藩より長崎へ百武善左衛門(参政相良内記属官)長崎署吏原口弥左衛門

Text (red):

<sup>30</sup>深堀の人間は泳いで逃げた

Text (red):

鎮台(奉行か奉行所)が決戦を布告して江戸と長崎佐賀藩邸に次々と雨のように 先鋒両隊警固両隊即日進発佐賀中が沸いた

Text (red):

18日 朝 成富千兵衛田中東兵衛が出陣の先駆け

Note (yellow):

佐賀藩累卵の危機のため

Text (red):

佐賀藩累卵の危機のため

Note (yellow):

江戸藩邸は金不足

Text (red):

江戸藩邸は金不足

Note (yellow):

浪花に借金のため2人発つ

Text (red):

浪花に借金のため2人発つ

Text (red):

危い

Text (red):

信用証書

Text (red):

ついな

--- Page 47 ---

<sup>31</sup>Text (red), 石橋正明:

本藩資金無く武備荒廢

Text (red), 石橋正明:

備え弱く兵数小 統制無し

Note (color #FFEB3B), 石橋正明:

古賀穀堂 絶無金穀武備荒廢

Note (color #FFEB3B), 石橋正明:

備え弱く兵数小 統制無し

Note (yellow):

長崎 船の備えは虚弱で兵は少なし

Note (yellow):

本藩資金無く武備荒廢

Note (yellow):

奢淫際限なく女寵

Note (yellow):

千葉 蒲原 切腹 日時も記載

Text (red):

千葉 蒲原 切腹

Line (blue)

Text (red):

藩士の処分

Note (yellow):

藩士の処分

Text (red):

32

(report generated by GoodReader)